

本の総合目録が完成するのを祈念してやまない次第である。

(W. Simon and H. G. H. Nelson: Manchu Books in London, A Union Catalogue, London, 1977, 182 pages, 12 plates)

アントニー・ウェッセルス著

近代のアラビア語によるマホメット伝

——ムハンマド・フサイン・ハイカル著

『マホメットの生涯』の批判的研究——

後藤 晃

イスラムの預言者マホメットの伝記に対する学問的興味は彼の死後数十年に始まり今日に至っている。この千数百年間に書かれた「マホメット伝」は無数であり、イスラムとは縁遠い明治以後の日本ですら十点を超えている。ただ、当然のことながら、興味の内容は地域と時代により様々であり、イスラムが発展した中心舞台であるアラビア語世界では、イスラム法の法源研究のための古典的な「伝記研究」は次第にすたれ、十一世紀頃からは「聖者」としてのマホメットへの関心が高まっていく。その関心のもとでは、古典的な伝記では

軽く触れられているにすぎないマホメットの為した奇跡が強調される。またマホメット個人への崇拜が盛んとなり、生年すらさだかでないマホメットの「誕生日」もいつしか確定されて、誕生祭が民衆のための一年を通しての最大の祭りの一つにまで発展した。古典的な伝記は法学者の間ですらかえりみられず、学者は物語り風の「聖者伝」を書き、人々はそれを読み、あるいは聞いて、マホメットを慕った。

西欧からの知的刺激を受けたアラブ近代人にとって、自らの抛りどころであるイスラムを開いたマホメットへの関心は、おのずと、「聖者伝」とは別なものになる。本書はそれを扱う。本書ではまず、一九三〇年代にエジプトにおこった文学者による「マホメット伝」執筆のブームの時代的背景が分析される。つづいて、エジプトの代表的知識人タハ・フサインの『マホメット伝余話』、マホメットを漫画化して評判を得たヴォルテールの戯曲に反撥してつくられたタウフフィク・ハーキムの対話劇、トーマス・カーライルの小説に刺激されたアッカードの『英雄マホメット』、戦後に出版されたシャルカーウィーの『自由の使者マホメット』とナギーブ・マフフーズの『我が街角の人々』等が紹介される。そして本論は、副題にあるとおり、フサイン・ハイカルの『ハヤート・ムハンマド』の評論である。この『ハヤート・ムハンマド』は、そもそもは、西欧で評判を得、アラブ世界の知識人の間

でも広く読まれていたデルメンゲムの『マホメット伝』への批判として週刊誌に連載され、それが独立した「マホメット伝」にまとめられ、単行本とし出版されたもので初版は一九三五年に出ている。その後、今日に至るまで、版を重ね、現在でもアラブ世界で最もポピュラーな「マホメット伝」であり、その一部は教科書に採用され、また英語、トルコ語、ウルドゥー語、さらには中国語にまで翻訳されている。本書はこのフサイン・ハイカルの「マホメット伝」を、(1)人間として預言者としてのマホメット、(2)夫としてのマホメット、(3)政治家としてのマホメット、という三つの側面から詳細に検討して、フサイン・ハイカルのもつマホメット像を追求する。著者の結論は、それは保守的なイスラム伝統主義者にも西欧的な教養を身につけた近代人アラブにも受け入れられる中庸を得たものである、という点にある。

フサイン・ハイカルは自らの「マホメット伝」を「科学的な歴史研究」に基づいたものである、と主張する。これに対する著者の目は厳しい。今日、「マホメット伝」の科学的な歴史研究のための根本資料は、イブン・ヒシャーム、イブン・サード、ワーキデイーの著書である。フサイン・ハイカルはこの三書をすべて利用し、他にも多くの古典を参照したと主張するが、著者は、彼はイブン・ヒシャームのみを利用し、他は利用したとしても孫引が大部分で原典はほとんど利

用していない、と指摘する。フサイン・ハイカルはまた西欧の「東洋学者達」の研究をふまえたといいい、それに反論を試みるが、この「東洋学者達」は、実はミューアー一人にすぎず、カエターニー、ラマンズ、ブフル、ヴェルハウゼン等の重要な研究にはあたっていないことを明らかにしている。フサイン・ハイカルは「マホメット伝」はアラブ世界でも「科学的な歴史研究」の端緒ではあってもそれ以上のものではない、と著者はいう。この見解は「歴史研究書」としてフサイン・ハイカルの本をみた場合はまったく正しい。

「歴史研究書」としては決して水準の高くないフサイン・ハイカルは「マホメット伝」は、しかし、現代のアラブ世界には大きな影響力を依然としてもっている。「マホメット伝」の古典中の古典はイブン・ヒシャームのそれである。この古典は現在でも繰り返し校訂されたいうで出版されている。しかし、どこの世界でも、古典が知識人によってさえも理解されない場合が多い。アラブ世界にあっても、イブン・ヒシャームの古典を理解できるアラブ人はごく少数である。フサイン・ハイカルは「マホメット伝」は、いわば、イブン・ヒシャームの古典の現代語訳である。この書は、アラブ人のもつマホメット像を、物語り風「聖者伝」ではなく、古典的「マホメット伝」からつくりあげるのに一つの役割を果たしている。この点での分析が本書に欠けているのではないだろう

か。フサイン・ハイカルの書が「マホメット伝」の「科学的歴史研究」の端緒であるとしても、その後四十年をへた今日でも、アラブ世界での「マホメット伝研究」は進展していない。その原因は何であるかを、本書は何も語らない。このような弱点をもつとはいえ、本書は興味深い研究書である。何よりも、現代に生きる人々が好む「マホメット伝」を古典と比較するという着想が優れているからである。

(Antonie Wessels: *A Modern Arabic Biography of Muhammad, a critical study of Muhammad Husayn Haykal's "Hayat Muhammad"*, Leiden, 1972, xii+272 p.)

トルコ民族世界ハンドブック

護 雅 夫

まず、本書の構成、執筆者、内容を示すと以下のごとくである。

序文。第一篇 トルコ・ヘテュルク民族居住領域の地理。はしがき トルコ民族の原住地、分布地域。I アフメト・アルデル (Ahmet Ardel) トルコ民族居住領域の自然地

理。II ユスフ・ドゥネズ (Yusuf Dönmez) トルコ民族世界の人文・経済地理的概観。III アフメト・アルデル、タールプ・ニシエル (Talip Nisicel) ハルカン半島、シリア、イラクにおけるトルコ民族居住領域とキプロス島との人文・経済地理。

第二篇 トルコ文化の基礎。I トルコ語。A ウラル・アルタイおよびアルタイ語。1 アフメト・テミル (Ahmet Temir) ウラル・アルタイ語学説。2 タラト・テキン (Talât Tekin) アルタイ語学説。B トルコ語の諸方言。はしがき R-ラフメティ・アラト (R. Rahmeti Arat) トルコ民族の言語。1 シイナスマーテキン (Sinasi Tekin) 古代トルコ語。2 西部トルコ語。a ファルク・ケーティムルタシム (Faruk K. Timurtas) 古代アナトリアトルコ語。b ムハッレム・エルギン (Muharrem Ergin) オスマン語。c 同上、アナトリアのトルコ語。3 同上、東部トルコ語 (チャガタイ語)。4 アフメト・テミル、北部トルコ語。5 R-ラフメティ・アラト、アフメト・テミル、トルコ語諸方言の分類。6 ファルク・ケーティムルタシム、トルコ語主義潮流史。7 ムハッレム・エルギン、トルコ民族における文字・アルファベット。8 アフメト・テミル、トルコ諸方言。II トルコ文学。1 アブデュルカディル・イナン (Abdurkadir İnan) トルコ民族の叙事詩。2 サアデト